

ポーランドの大統領選（607号）

2025年 6月 石館

ポーランドで1日、ドゥダ大統領の任期満了に伴う大統領選の決選投票が行われた。開票結果によると、右派の最大野党“法と正義”（P I S）が推す国家記憶院総裁のナブロツキ氏が50.89%、中道与党の“市民プラットフォーム”が擁立したチャフコフスキ・ワルシャワ市長が49.11%で僅差での勝利だった。

P I S出身のドゥダ氏に続いて“自国第一主義”を掲げるナブロツキ氏が勝利したことで、トウスク首相率いる市民プラットフォーム主導の連立政権との対立の構図は解消されず、トウスク氏の親EU路線が一層停滞するのは不可避である。



2023年の総選挙では権威主義的な政策でEUとの対立を深めたP I S政権が市民プラットフォームに敗れて下野し、トウスク連立政権が誕生した。

ところがドゥダ氏は、EUとの関係修復などを柱とするトウスク氏の改革路線を拒否権の行使で妨害。下院（定数460）は再議決で5分の3以上が賛成すれば大統領の拒否権を覆すことが出来るが、連立与党の議席は240に留まる。今回の選挙では大統領と首相の出身政党の“ねじれ”が解消できるかが焦点となっていたが、解消できなかった。

ところがドゥダ氏は、EUとの関係修復などを柱とするトウスク氏の改革路線を拒否権の行使で

ナブロツキ氏はトランプ米政権との関係強化を重視している。ロシアによるウクライナ侵略に関しては、ウクライナ支援の継続こそ支持するが、同国のNATO加盟には反対しており、対ロ防衛に向けた欧州の結束強化にも消極的だ。

上の地図でも分かる通り、ポーランドはウクライナ、ベラルーシ、ドイツ、チェコ、スロバキアなどと国境を接する大国であり、ウクライナ難民を最も多く

引き受けてきた。欧州外交では、最近の大統領選でルーマニアでは親EUの大統領が誕生したり、今度はポーランドでは反EUの大統領が誕生、またハンガリー、スロバキアなどの中東欧の強権国家は“EUに替わる同盟関係”の構築を唱えるなど、錯綜している。

選挙では親EUのトウスク首相率いる現政権のリベラル路線の是非が問われた。



2023年に発足した現政権は、8年続いた“法と正義”政権が推し進めた司法メディアの統制強化の撤廃を目指しているが、同党出身のドウダ大統領が法案の拒否権を行使し、改革が滞

っている。ナブロッツキ氏はドウダ氏の方針を踏襲するとみられトウスク政権に打撃となりそうだ。

ナブロッツキ氏の勝利を支えたのは、カトリックの価値観を重視する保守派の岩盤層だ。同氏の支持者は“伝統的な家族観を重視する愛国主義者”とし“トウスク氏は欧州にルーツを持たない移民を多く受け入れ我々の誇りである治安を台無しにしかねない”と危機感をあらわにしている。

	首相 政権を担当 中道 「市民プラットフォーム」		大統領 法案に拒否権 右派 「法と正義」
トウスク氏	ナブロッツキ氏(←ドウダ氏)		
協調重視	対EU	自国第一主義、EU懐疑派	
積極支援、NATO加盟に賛成	対ウクライナ	避難民への支援削減、NATO加盟に反対	
司法・メディアの		性的少数者	

与野党ともロシアの脅威に対抗するため、国防費を大幅に増やす方針では一致している。ナブロッツキ氏は“ポーランドの安全保障に資する”という理由で、ウクライナへの軍事支援を継続する考えだ。

ただ同国のNATOやEUへの加盟には反対を公言する。第二

次世界大戦中にウクライナ民族主義者がポーランド人を虐殺したとされる歴史問題で、ウクライナの責任も追及する。

ポーランドはウクライナ支援の主要な拠点として多くな役割を果たしてきたが風向きが変わる可能性もある。ナブロッツキ氏はウクライナ避難民への補助金削減を公約に盛り込み、支援疲れが広がる有権者の支持につなげた。

1回目の投票で3位と4位に入った極右候補の支持層の多くがナブロッツキ氏の支持に回ったことが、決選投票の勝敗を左右したようだ。1回目の投票で2人の得票率は2割を超えていた。

ナブロッツキ氏は3位につけた極右政党“同盟”のメンツェン党首の支持を取り付けるため減税や移民排斥、銃保有の自由などの政策を支持すると言及した。若者を中心に極右への支持層が急伸し、他の中東欧諸国と同様ポーランドの右旋回が進む可能性が高い。前号606号でルーマニアの大統領が親EUになったことをお伝えしEUは一安心したが、今回のポーランド大統領選で反EUの大統領がなったことは、EUに衝撃を与えた。



ポーランドの首都ワルシャワ

矢印の先はソビエト連邦の一員だったころに建てられたいわゆるスターリン建築様式の建物。

ポーランドとルーマニアでは国力も違うし、ウクライナ支援に関してもその影響力は大きな違いがある。

ポーランドのソ連やドイツによる何回も蹂躪された血に塗られた歴史に関しては、長くなるのでここでは割愛するが、自国の文化を守るための不屈不倒の強い精神力には驚くばかりである。

小生はポーランドには何回も行ったことがあるが、ワルシャワではスターリン様式の建物の中に入ったことがある。この建物はいかにも抑圧者であるスター

リンの威厳を示す重厚な建物であった。南部のドイツ国境の近くのナチのアウトシュビッツ捕虜収容所跡地にも行き胸が締め付けられる思いもした。またポーランド随一の観光地南部の古都クラクフにも足を延ばしたことがある。



古都クラクフ

ここは11世紀から17世紀初頭まで550年にわたりポーランドの首都だった美しい町並みが残っている。